

# 池坊



## 聖徳太子と池坊

華道で有名な池坊は、聖徳太子とゆかりがあります。  
華道発祥の地とされる六角堂（正式名称は紫雲山頂法寺）。用明天皇2年（587）、四天王寺建立のための用材を求めてこの地を訪れた聖徳太子が、霊夢によって六角形の御堂を建て、自らの護持仏である如意輪観音像を安置したと伝えられています。  
その六角堂の北側には聖徳太子が沐浴したという池がありました。その



京都の六角通りの所以でもある六角堂。その形から「六角さん」と呼ばれ親しまれている。

池のほとりに僧達が寝泊まりする宿舎があったことから、六角堂の住職は「池坊」と呼ばれるようになったといわれています。

聖徳太子に仕えていた小野妹子が出家してここに入ったといわれています。小野妹子と言えば聖徳太子の命で中国に渡った「遣隋使」が有名で、また和歌で有名な小野小町は小野妹子の子孫とも言われています。

小野妹子はこの六角堂の初代住職として朝夕、仏前に花を供え始めたことがのちの華道の始まりとされています。その後、歴代住職である池坊は仏前への花の添え方を工夫し続け、華道池坊が現在に至っているということです。

## 早良組 蠟燭講

場所／安隠殿3階

おたくみごしょうそく  
御巧御消息授与式 令和3年12月1日

早良組で代々行われてきた「蠟燭講」が、平成30年で140周年を迎えました。その140周年にあたり本願寺よりご消息が発表されました。コロナ禍でなかなか授与式ができておりませんでした。令和3年12月1日京都本願寺安隠殿にて無事行うことができました。早良組へのお披露目は3月の蠟燭講を予定していますが、開催は感染状況を鑑みたものとなりますので、お近くの「ご寺院へ問い合わせ下さい。」



ご消息とはお手紙などの形式をとった法語のことをいいます。現在では御門主が特定の事項についてその意思を述べる為に發布するものとされています。



## はじめに

### 聖徳太子1400回忌

令和3年4月13日〜14日、本願寺の御堂内にて厳かに聖徳太子1400回忌が勤修されました。親鸞聖人が「和国の教主」として尊敬された聖徳太子。今回はそんな聖徳太子と私たち浄土真宗との関わりについてご紹介します。

### 聖徳太子

令和3年9月、新二万円札の印刷が始まりました。福沢諭吉から渋沢栄一へと変わり時代の変化を感じる出来事です。その福沢諭吉の前、二万円札に刷られていたのが聖徳太子です。昭和33年〜61年まで長らく印刷されました。それほど日本人にとって聖徳太子は特別な方なのでしょう。

聖徳太子は古墳時代の後期、574年に生まれ、後に推古天皇のもとで活躍したとされています。主な事業としては法隆寺や四天王寺の建立などが有名ですが、そのほかにもあげれば枚挙にいとまがありません。

そんな日本人なら誰もが知る聖徳太子ですが、実は私たち浄土真宗とも深い関わりがあるのです。

### 本堂の聖徳太子

多くの浄土真宗の寺院には聖徳太子像が奉懸されています。本堂左余間（向かって右）に奉懸されている絵像が聖徳太子で、そのお姿として最も多いのは太子16歳の「聖徳太子孝養像」のお姿です。私たちが教科書や二万円札でよく知っている姿ではありませんので「目で聖徳太子と気づく人は少ないかもしれません。」

髪をみづらに結び袈裟をきて柄香炉を持って立たれており、上に書かれている賛銘と合わせて考えると「日本に仏法を興隆されたお姿」としてご安置されています。

また、一部の寺院では太子のご木像がご安置されることもあり、太子信仰は浄土真宗にとって重要な意味合いがあることが窺えます。

# 聖徳太子

日出処の天子

早良組  
だより





特集 聖徳太子 ― 日出処の天子 ―

# 親鸞聖人と 聖徳太子



比叡山を降りる  
決意を促したのは  
聖徳太子!?

和讃は  
約2000首!

親鸞聖人は聖徳太子を「和国の教主」として、日本に仏法を興隆したお方として大変敬われていたことが窺えます。

奉懸は  
いつ頃から?

本堂に奉懸される聖徳太子孝養像の上には賛銘といわれる文章が書かれています。そこには、「吾為利生出彼 衡山入此日域 降伏守屋之邪見 終顯仏法之威徳」。(われ利生のために彼の衡山を出でて、この日域に入りて守屋の邪見を降伏し、ついに仏法の威徳を顕わす。)という「上宮太子御記」の「太子御廟記文」が書かれています。

親鸞聖人は9歳で僧侶となられ比叡山に登られました。しかし、29歳のとき法然聖人との出会いにより山を降りる決断をされるのですが、その際に京都市内にある六角堂へ100日間参籠されました。そして95日目の朝に観音菩薩が夢に現れ、そのお告げによつて決断されるのです。親鸞聖人は聖徳太子を観音菩薩の化身であるとみられていましたから、人生の転機となる夢告は聖徳太子からと捉える事ができます。

親鸞聖人は生涯で約6000首もの「和讃」を詠まれました。その中で聖徳太子に関する「和讃」はなんと2000首前後あり、全体の約三分の一を占めています。ここでは代表的なものを一首だけご紹介します。

「和国の教主聖徳皇  
広大恩徳謝しがたし  
一心に帰命したてまつり  
奉讃不退ならしめよ」  
(正像末和讃「聖徳奉讃」)

そんな聖徳太子ですが、実はいつ頃から本堂に奉懸されるようになったのか定かではありません。第八代目蓮如上人の頃には現在の形だったと考えられています。関東の門弟や京都の信仰など様々な要因が重なり現在のこのような形式となりました。

## 浄土真宗と 聖徳太子

浄土真宗と聖徳太子の関係を知る上でとても重要になるのが真言律宗です。

浄土真宗と真言律宗では教義の上では全くといっていいほど接点がありませんが、実は教団としては互いに深く関係し合っていたと考えられています。

真言律宗は真言を極めながらも戒律を重視して、釈尊本来の仏教に立ち戻ろうとする教団ですが、初期浄土真宗との関わりが注目されています。真言律宗の開祖観尊は時の政権北条時頼に依頼されて聖徳太子像の供養をするなど、聖徳太子を通じて朝廷と関わりを持っていました。その叡尊の弟子忍性は鎌倉で様々な慈善事業を行いました。また、関東で最初に入ったのは常陸国(今の茨城県)でした。常陸国と言えば親鸞聖人が晩年までお過ごしになられたところ。その後親鸞聖人は京都へと移

るのですが、ちょうど親鸞聖人と入れ替わるように太子信仰を持った真言律宗が関東に入ったのです。両宗の活動は、拠点となったお寺が浄土宗系のお寺であった事などからかなり関わりがあったようです。先に述べたように親鸞聖人は聖徳太子を大変慕っておられたので浄土真宗の門徒の人々は聖徳太子についてよく知っていたと考えられます。しかし、聖徳太子の絵像や木像などの視覚情報はありませんでした。そこへ、真言律宗が絵像や木像を持ち込んだことにより浄土真宗の中

に自然と聖徳太子像が安置されるようになりました。その名残で今でも関東の浄土真宗の寺院では木像の聖徳太子像をご安置しているお寺が多く残っています。真言律宗はその後、幕府や朝廷の衰退とともに縮小していき、太子信仰はそのまま浄土真宗へと受け継がれ、様々な太子像とともに今日まで残されてきました。親鸞聖人が敬い大切にされた聖徳太子。そのお姿を本堂へ奉懸する私たち浄土真宗にとって聖徳太子はとても大切なお方なのです。



東京都築地にある法重寺にご安置される聖徳太子のご木像。



早良組徳勝寺に奉懸されている「聖徳太子御絵伝」表書きには大正10年に法隆寺蔵の御絵伝から主要部分を取り出したものがある。

コラム

上の文字は  
なんて書いてある?



本堂に奉懸された聖徳太子孝養像。上に賛銘が書かれています。